Osaka University Knowledge Archive

Title	安部公房『砂の女』論
Author(s)	Lukacova, Eva
Citation	大阪大学, 2002, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44118
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【3】

氏　　名	LUKACOVA, EVA（ルカーチョヴァー エヴァ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学 位 記 番 号	第　17267　号
学位授与年月日	平成14年9月17日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学 位 論 文 名	**安部公房『砂の女』論**
論文審査委員	（主査） 教　授　伊井　春樹 （副査） 教　授　出原　隆俊　　教　授　内藤　　高

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、安部公房の代表的な作品『砂の女』について、主人公である男「順平」ではなく、むしろ「女」を描こうとしたとし、その位置づけについて詳細に論じたもので、400字詰原稿用紙にしておよそ570枚からなる。全体の構成は、序「『砂の女』はいかにして解釈されてきたのか」、第一章「安部公房の生涯と作品」、第二章「『砂の女』における「虚しさ」の隠喩」、第三章「安部の「私が書きたい女」からの考察」、第四章「「女」の背景について」、第五章「「女」とその描写」、第六章「「女」の性」、第七章「「女」の鏡」、第八章「安部の文学方法」とする。序では、従来の『砂の女』の研究史概観、そこで言及される問題点を整理し、第一章では安部公房の生涯と作品の概要をまとめ、安部文学の性格を考察する。第二章は「砂」の物質的な性質がそのまま作品の基調となっており、それは「虚しさ」であり、その隠喩が作品の各所に表現されているとする。第三章では、安部自身が書いたエッセー『私が書きたい女』を通して『砂の女』の「女」論を考察、第四章は村落において「女」がどのような扱いを受け、何を求められているのかを分析する。村人の手に自分の人生を託し、毎日穴から砂を掻き出す作業に従順に従う「女」は、順平には苦痛で虚しい作業と目に映っても、彼女にはそれが人生の生きがいではなかったかとし、そこから「女」の沈黙のしぐさや裏に隠された性質を読み解いていく。

第五章では、「女」の描写方法として、生き物による比喩との関連を見る。「女」を「動物」とか「鼠」「犬」「兎」「蝙蝠」「干魚」「小判鮫」と、動物等の比喩がなされると、そこには「男」の目から嫌悪感の対象となっていることが知られる。そのように不気味でおぞましく、触れがたい存在でありながら、性的に惹きつけられてもいく様相を剔抉していく。また、虫の描写としてのニワハンミョウとの相似した姿を述べ、『砂の女』を発表する以前に書いた安部の『チチンデラヤパナ』との関連を分析する。また、最後に「女」が子宮外妊娠によって緊急に穴から運び出される場面で、「サナギのようにくるまれ」て搬出されたことついて、サナギのメタファーから死と再生の読みの可能性を示す。第六章は、「女」と砂、生殖能力、生、死に言及し、砂から抽出する水との関連、そこから二人の先の運命について考察する。女の罠性を論じることで、安部の書きたいとした女の種的側面と社会的側面にも触れる。第七章は、「女」のほしがった「鏡」を考察することによって、そこには彼女のアイデンティティの要素が秘められていることを明らかにする。第八章は、『砂の女』の語り手の視点の変化を指摘し、「男」の目を通じて描写する「女」像、逆説や詩的表現、皮肉やユーモアの含まれた独特の文体、多義性のある表現方法をも分析していく。

論文審査の結果の要旨

『砂の女』は比較的研究文献の多い作品とはいえ、これほどまでに詳細で、多方面から本格的に考察した論文は初めての例である。しかも、留学生という立場を活用し、日本の研究文献は勿論のこと、英語やスロヴァキア語訳とともに、海外での多くの研究文献も利用するなど、新しい視点からの成果を得ることができた。共同体の村における「女」の位置づけについて、従来はそれほど明確に論じられてこなかった。名前のない「女」は初めから村の構成員ではなかったこと、また村人は三十歳ばかりの「女」を初めは「婆さん」と呼ぶのは、子供を生んで村の共同体を拡大する可能性のない人物として扱っていたという。順平の登場によって「おかあちゃん」と呼称が変化するのは、子供を生む可能性が生じた、いわば村における「女」の立場が急転した結果だとする。このような鋭い指摘と記号論的な読みの確かさは、従来『砂の女』ではなされてこなかっただけに、意義のある発見であったといえよう。「女」は、客観的に見ればいわば奴隷であり、囚人に等しく、村人は構成員として平等に扱っていないものの、自分の日常の砂を掻き出すという作業が共同体の中で受け入れられ、存在意義があると認識することによって、自らの生活に満足し、穴から逃げ出ようともしないとするなど、斬新な解釈を示す。

また、もっとも大きな成果としては、「女」のメタファーとして多様される動物や昆虫の描写の分析で、それぞれを指摘して作品内での機能を明らかにしていく。それはたんなる「女」に対する表現だけではなく、昆虫採集から村に迷い込み、捉えられて穴の生活をするようになる順平の内面の変化とも連動させての解釈はすぐれたものがある。さらに動物や昆虫を通じての「女」の肉体表現は、現代の身体論ともかかわり、興味深い考察となつている。

ただ、論文の構成として、第一章に安部公房の生涯と作品の解説を置き、概説的な説明と、安部公房は異端的な作風に特色があるとして『砂の女』論へ導く方法は、パターン化しすぎているのと、各章の内容に深まりはあるものの、必ずしもそれぞれが有効に連関しているわけでもなく、かなり不統一な印象もまぬかれない。そのような瑕疵はあるものの、新しい発見と提言を含んでおり、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。